



血に飢えたゾンビの群れに食り喰われる美女達

ゾンビワールド 後編

作者 大黒達也

ゾンビワールド 後編

作者 大黒達也

『はじめに』

西暦二千十*年、東西関係の悪化により、第三次世界大戦が勃発寸前となる。全面核戦争がひとたび開始されれば、人類はおろか地球全土に生息する全生命の絶滅が予測された。そのとき人類発生以来、歴史の奥底に潜んでいた闇の種族達が全人類に戦いを挑むべく蜂起した。各国の首脳や軍部指導者達が、彼らにより支配された。さらには、人類の数十%が、闇の種族が放ったウイルスによりゾンビ化し、軍隊を無力化させてしまった。

その結果、数週間のうちに全世界が、彼らの手中に落ちてしまった。全面核戦争は阻止され、全生命体の絶滅

は免れたが、人類は闇の種族達により支配されることとなる。

二十代の若くて美しい女達は、闇の種族達の性交奴隷兼食料として施設に監禁された。それ以外の人間は、労力として酷使され、あるいはゾンビ達の食料として供せられた。刃向う者は容赦なく殺戮された。

科学者等一部の人間達は、闇の種族達に知識と技術を提供する条件で生存を保障され、仲間として迎え入れられた。

この物語は、人類世界が崩壊後、少数の人間達が自由と生存を求めて闇の種族達に戦いを挑むべく立ち上がり、死闘を続ける過程を描いている。

『登場人物』

黒木 くろき
雄介 ゆうすけ

筋力、生命力を人間の限界まで高めた人間兵器を研究する目的で、防衛省の研究機関にて秘密裏に造られた改造人間。年齢三十五歳。身長百八十五センチ体重八十五キロ。全身を鍛え抜かれた覆いのような筋肉で包まれている。

筋力は通常人の二十倍。細胞の再生能力も高く、刃物や銃器による傷で死ぬことは無い。

元は、陸上自衛隊の特殊部隊に所属しており、様々な携帯兵器の扱いに習熟している。

工藤 美奈

防衛省の研究機関に所属する研究員。年齢二十四歳。

高級モデルも及ばぬスレンダーで美しい容姿の持ち主。

黒木の筋力や再生能力についてデータ分析を行う。

『目次』

第一章 美肉の饗宴

第二章 オーグル族

第三章 美人姉妹と吸血鬼

第四章 美しき性奴隷

第五章 メインディッシュ

第六章 反撃の獅子

第七章 新天地へ

『本編』

第一章 美肉の饗宴

旧品川駅近くに聳え立つ高層ビルの三十階。そこは、命を保障してもらうことを条件に支配者である吸血鬼族に忠誠を誓った研究者達の居住区画であった。

そのフロアの一角に主任研究員の大原学と妻の理沙が住んでいた。二人は三十畳あまりのダイニングルームでふたりだけの夕食を摂っていた。旧T大学卒で博士号を持つ大原学は三十代後半であり、妻の理沙は、二十代前半で豊かな肢体と美貌の持ち主であった。

「もうたくさんよ！」

理沙が椅子を蹴って席を立った。

「どうしたんだ。声が大きいぞ」

学は困惑した表情で理沙の顔を見詰めた。

「私は人肉なんか絶対食べたく無いわ！」

理沙は目の前で、肉汁が滴り湯気をあげているステーキ肉を嫌悪の目で見詰めた。ステーキの近くには女性器の形をした焼肉も添えられていた。

「何を言っているんだ。人肉を食べるのが、高貴なる種族様への忠誠の証でもあるのだぞ」

学も立ち上がった。肩先が小さく震えていた。

「魔物どもに支配され、人間の肉を食べてまで生きたくはないわ」

「どうするつもりなんだ？」

「出て行くわ」

理沙が美しい大きな瞳で学の顔をじっと見詰めた。

「冗談じゃない！周りは制御不能なゾンビどもで満ち溢れているんだぞ」

「そうね。ここを一步でも出たら、命が無いことはわかっているわ。でもこんな生活を続けるくらいなら死んだ方がマシよ」

理沙はそう言って肩を落とした。

「どうしても行くと言うのか？」

「……」

理沙は無言のまま、学の瞳をじっと見詰め、大きく頷いた。

「わかった。俺も行く。お前を失ってまで生きたいと思うほど、この世に未練は無いよ」

学は自分に言い聞かせるような口調で言った。

「本当に！」

さっきまで沈んでいた理沙の顔がぱっと明るくなった。

「準備は出来ているのか？」

「大戦前に買っておいたインスタント食品が三日分はあるわ」

「俺は武器と車を準備する。散弾銃の銃弾が数十発は残っている筈だ」

学は趣味で狩猟用の散弾銃を保有していた。もちろん銃器の在り処は、支配層である吸血鬼族やオーグル族には隠していた。

その日の深夜十一時に大原学と妻の理沙は、宿泊施設であるビルの地階にある駐車場に来ていた。施設内の警

備は緩やかであり、移動するのは容易であった。誰もゾンビ達が徘徊する外には出ることは無いと思われていたからだ。

駐車場内は非常用ランプが点けられているだけで薄暗かった。数百坪はある駐車場スペースに研究所員が保有していた自家用車が数十台停車していた。

学は日用雑貨や散弾銃の銃弾が詰まったリュックサックを背負い、両手でポンプアクション式の散弾銃を持っていた。散弾銃には、弾装に二発、チェンバーに一発で計三発のスラッグ弾がこめられていた。スラッグ弾は近距離であればヒグマでも撃ち倒せるほどの威力があった。

理沙も日用品や食料が詰まったリュックサックを背負

っていた。ジーンズ製のジャンパーと白く美しい太腿が露出する短パンを穿いていた。

すぐ近くにランドクルーザが停まっていた。夫婦が所有していた車だ。ふたりは無言のまま、車に乗り込んだ。

「行くよ」

学は、運転席に座り、助手席の理沙に声をかけた。学の左手が理沙の白い太腿に載せられていた。太腿には鳥肌が立っていた。

理沙は学の横顔をじっと見詰め、無言で大きく頷いた。ランドクルーザのエンジンが始動し、地上目指して動き出した。

地上は地獄そのものだった。いたるところにゾンビ達

に食い荒らされた死骸が散乱していた。学と理沙を乗せたランドクルーザは、旧品川区内の国道をヘッドランプの明かりに照らし出される腐乱死体を踏み潰しながら、時速八〇キロ以上で走行していた。他に動いている車両は皆無であった。

絶え間無くゾンビがヘッドランプ目指して突進してきた。その度に頑丈な車体がゾンビ達を跳ね飛ばした。ウインドウオツシャー液を出しっぱなしにして、ワイパーを全開にしなければ、ゾンビの脳漿や血液で視界が遮られるほどであった。

助手席に座っていた理沙は、両手で顔を覆い、泣き叫んでいた。学には優しく声をかけてやる余裕は無かった。燃料計をちらりと見た。燃料タンクはほぼ満タンの状態

であった。何もトラブルが無ければ、数百キロは進める筈だ。学は都心部を抜けて、山間部の過疎地に逃げ込むつもりでいた。人口が少なければ、ゾンビの数も少ないものと思っていた。

その時、前方に巨大な影が現れた。ヘッドランプで照らし出された物は、オーグル族が移動に使う巨大な装甲車両であった。学は咄嗟にブレーキを踏み込み、ハンドル操作で避けようとしたが、間に合わなかった。激しくスピンしながら装甲車の前方に激突し、反動で反転した状態で路上を数百メートルも滑りながら停車した。二人ともシートベルトをしており、エアバックが動作したので、軽症で済んだが衝撃で意識を失っていた。

二人とも意識を失っていたのは数分程度であった。目覚めたときは、大型装甲車両の内部であった。学は後ろ手に手錠をされ、床に転がされていた。

目の前には、巨大なオーグル二名が向き合って座っており、全裸に剥かれた理沙がその間の床に横たえられていた。

軍服を着て、悪鬼のような顔をしたオーグル達の口元には黄色い色をした巨大な犬歯が剥き出しになり、先端からは涎が滴り落ちていた。

オーグル達は巨大な手の平で、理沙の全身を触りまくっていた。理沙は全身を震わせ泣き叫んでいた。

「止めろ。止めてくれ！」

学は床に横たわったまま、オーグル達に懇願した。

「裏切り者は黙っている！卑しい人間めが！」

ふたりのオーグル達が、凄まじい形相で学を睨み付けた。

「お願いです。妻を殺さないでください」

「こいつ人間の分際で、俺達に意見しようというのか。

生意気な奴だ」

ひとりのオーグルが警棒で学の頭部を殴りつけた。さ

ほど力を入れたようには見えなかったが、学は脳震盪を

起こして意識を失ってしまった。

「貴方！」

理沙が学の命を案じて、声を出した。

「お前の声は何と美しいのだろうか。肉もたいそう柔らかくて美味しいのだろうか」

オーグルが、巨大な顔を美沙に近付けた。口元から大量の涎が滴り落ちた。

「いや！殺さないで。お願い！」

「本当にいい声で泣きやがるぜ」

オーグルが太さ三センチほどもある人差し指を理沙のアヌスに差し込もうとした。理沙は、下半身を引裂かれるような苦痛に背筋を仰け反らせ絶叫した。もう一人のオーグルも理沙の豊かな乳房に吸い付きながら、中指を膣に食い込ませていた。

暫く指先で理沙の裸身を楽しんだ後で、今度は理沙をうつ伏せにさせて、盛り上がった白い尻の合間に巨大な顔をつけ、長い舌でアヌスや膣を舐めた。

理沙はもうひとりのオーグルに、馬並の巨大な男根を

口に押し付けられているので、叫び声をあげることができなかつた。

生きたまま食い殺される恐怖には勝てないのか、大きな瞳に涙を浮かべながら、異臭のする亀頭を必死の思いで舐めていた。

「大尉殿。この女に突っ込みたいです」

亀頭を舐めさせていたオーグルが、理沙の黒髪を鷲掴みにしながら上擦った声で言った。

「馬鹿者。そんなことをすれば、女は死んでしまうのでは無いか。ウィリアム様に叱られるぞ。捕虜は二人とも生きたまま連れ帰るように命令されておるのだ」

大尉と呼ばれたオーグルは、唾液に塗れた顔を理沙の尻から離した。

「わかりました。ですから私にも女のケツを舐めさせてください」

そのオーグルは、大尉の階級を持つオーグルが舐めている理沙の白い尻を食い入るように見詰めた。

「しようがない奴だ。もう少ししたら交代してやる。それまで待っている」

再び理沙の尻に顔をつけ、淫らな音をたてながらアヌスを舐り始めた。理沙はオーグル達が話す訛りのある英語を理解することができた。オーグル達の会話から、すぐには殺されないことを知って、安堵の気持ちでいっぱいだった。

アヌスを舐めているオーグルは、悪鬼のような形相をしている割に、愛撫は巧みであり、理沙は逝きそうにな

るのを必死に堪えていた。時より、意識を失っている学
の姿を盗み見た。死んだように動かなかった。理沙は、
運命が尽きたことを悟っていた。この場は生き延びても、
いずれ必ず殺されるであろう。

今度はオーグルの巨大な手により、仰向けにされた。
長く形の良い両足が大きく開かれた。オーグルの巨大な
頭部が股間で蠢いているのが見えた。激しい勢いで膣や
クリトリスを吸われた。もうひとりのオーグルが覆い被
さってきて乳房を舐めてきた。

理沙は化け物どもによって犯され、身悶えしているこ
とに激しい慙愧の念を覚えていた。悔しさのあまり声に
出して泣いた。

オーグルの愛撫が激しさを増した。理沙は何が何だか

分からなくなっていた。

巨大な頭部を両足で挟み込むようにして背筋を仰け反らせた。愛液でオーグルの顔を汚しながら絶頂に達した。意識は暗い闇の奥底に落ちていった。

時刻は午後六時過ぎ。麻布にある茂木博士の邸宅内に造られた中庭に大勢の吸血鬼や人間達が集まっていた。満面に蒼く透き通った水をたたえるプールサイドには、数十卓の丸テーブルが整然と並べられ、吸血鬼や研究所員やその妻達が正装して座っていた。

中央には仮設ステージが設けられており、その上には置かれたテーブルには、全裸に剥かれた元研究員の大原学と妻の理沙が横たえられていた。

その近くに燃え上がるような金髪のウィリアムが
マイクを片手に立っていた。彼の近くには、真紅のチ
ヤイナドレスを身に纏った真由美が影のように控え
ていた。

「今宵はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます
ございます。さて、皆様もご承知のことかと思いますが、
裏切り者を捕らえました。今宵、この場にてこの者
達の処刑を執行いたします。ご列席の皆様、壇上にお
上がりください。まず、刑を執行する前にこの者達を
辱めます。皆様に抱いていただきます」

ウィリアムの話聞いて、人間達の間にごよめきが
上がった。裏切り者といえ、以前仲間だった者に自ら
手を下さなければならぬことに戸惑いを覚えてい

た。

「ご静粛に。処刑に協力することが、我らへの忠誠の誓いであることを思い出していただきたい」

ウィリアムが場内をさっと見渡すと、嘘のように静かになった。席に着いていた男女が立ち上がり、壇上へと続く階段を上がり始めた。

テーブルの上に全裸で横たわる理沙は、白髪の中
年男が、近付いてくるのを見ていた。学と同僚である
男であり、面識があった。理沙はその男が以前から嫌
いであった。会う度に淫らな視線を送ってきたことを
思い出した。

男は、今満面に淫らな笑みを浮かべていた。理沙の両
足首が男に捕まれ大きく広げられた。

「売女め！」

男は血走った眼差しで理沙の股間を見詰めていた。

おもむろに顔を付けてきた。男のざらついた大きな舌が膣やクリトリスを舐ってくる。

「止めて。お願い」

理沙は、両手で顔を覆い身悶えした。男がいつそう激しく膣を吸ってきた。執拗な愛撫は暫くの間続けられた。男が動いた。ズボンを下げ、勃起した男根を膣にあてがい一気に挿入してきた。理沙の豊満な乳房を舐めながら腰を激しく動かした。理沙は嫌いな男に抱かれながら、泣き叫んだ。

男は数分間で、大量の精液を中出し理沙から離れた。

男にかわって今度は、男の妻が理沙をうつ伏せにした。その女とは何度か立ち話をしたことがあった。理沙より二十歳以上年上の女は、理沙のむき卵のようにすべすべで盛り上がった白い尻を食い入るように見詰めていた。

女は理沙の腰を押さえ込み、深い尻の割れ目に顔を入れてきた。激しい勢いでアヌスを吸われた。理沙には同性愛の趣向は無かった。おぞましきのあまり、息が詰まりそうだった。女は精液に塗れた理沙の膣に指先を挿入し、男根のように激しく出し入れさせた。

次の若い男には口を犯され、最後には大量の精液を飲まされた。

一方、学は研究員の妻達に犯されていた。学を最初に犯したのは二十代前半の美しい容姿を持つ若妻であつた。剥き出しの男根を手で摩られ、小さな口に含まれた。若妻は可愛い顔に似合わず、テクニシャンだつた。学の睾丸を手で弄ばれながら、男根を激しい勢いで吸われた。若妻の瞳は淫らな光をたたえていた。数分ともたなかつた。学は背筋を仰け反らせるようにして、若妻の口内にすべてを放出した。

次は四十代の熟女であつた。学をうつ伏せにし、男根を手で弄びながら、アヌスを舐めてきた。先ほど若妻の口に放出したばかりだというのに、熟女の巧みな愛撫に再び男根は張り裂けそうになるまで勃起していた。

達しそうになったところで、仰向けにされ男根を呑
込まれた。学は女のような喘ぎ声をあげながら、熟女
の口に射精した。

二人に対し、研究員とその妻達による激しい陵辱は、
延々と続けられた。

「そろそろいいでしょう」

ウイリアムが、両手を叩きながら皆に命令した。学
と理沙を犯していた者達は、一斉に動きを止め、ウイ
リアムの方に注目した。

ウイリアムは彼らが二人を騷りぬいている間、仮設
ステージのすぐ近くで、全裸にした若い女の股間から
血液を啜っていたのであった。女は大半の血液を失い、

息も絶え絶えであった。立ち上がってから近くで待機していたオーグルの衛兵に向けて女を放り投げた。生気を失った女の白い裸身が宙を飛んだ。衛兵は女を受け取り、盛り上がった白い尻に齧り付き、柔肉を噛み千切った。

「真由美。お前は学の処刑を手伝いなさい」

「はい」

ウィリアムの傍らに控えていた真由美は深々とお辞儀をして、仮設ステージの上にはらりと跳び上がった。女達によって大量の精液搾り取られ、全裸で横たわる学を軽々と肩に担ぎ上げ、ステージから飛び降りた。

憔悴しきった学を、大理石を敷き詰めた床に横たわ

らせた。次に真由美は真紅のチャイナドレスを脱ぎ始めた。すぐにシミひとつなくて極上の裸身となった。陰毛は剃られているので、股間の割れ目が僅かに見えた。

真由美は学の膝間付き、半勃起状態の男根を摩り始めた。瞳は欲情に濡れており、時折、口元に小さな赤い舌を見せた。あれだけ女達により精液を搾り取られてというのに男根はすぐに元気を取り戻した。真由美は淫らな笑みを浮べて、ごくりと生唾を飲み込み、男根を呑込んだ。学の反応を見ながら、激しいフェラチオを始めた。真由美は学のアヌスを指で弄びながら、暫く口腔性交を続けた。やがて学が背筋を大きく仰け反らせ、呻き声を上げながら真由美の口内に射精した。

真由美が激しい勢いで男根を吸い上げた。まるで一滴も漏らすまいとしているようだ。真由美は満面の笑みを浮かべながら学の精液を喉の奥に流し込んだ。

今度は立ち上がり、学の顔の上に腰を下ろして盛り上がった白い尻の割れ目で学の顔を踏みつけにした。

学の男根を手で摩りながら、豊満な腰を振り、股間を学の顔に擦りつけ始めた。すぐに美しい眉間に皺を寄せながら、鋭い喘ぎ声をあげた。隠微な膺の匂いに反応したのか、学の男根が再び勃起した。

真由美は再び立ち上がると、勃起した男根を呑込み激しく吸い上げた後で、それに跨り、騎上位で学を犯し始めた。豊満な乳房を両手で揉みながら激しく腰を前後左右に振った。学は既に十回近くは精液を搾り取られてお

り、体力の限界にあった。眉間に皺を寄せながら真由美の膣に己が分身を締め付けられる快樂とも苦痛とも言える快感に身悶えしていた。学が真由美の膣に精液を放出した瞬間、膣内が激しく煽動し、男根を締め上げてきた。真由美も絶頂を迎えていた。背筋を仰け反らせ、鋭い喘ぎ声を上げてから、学の胸に突っ伏した。

真由美はその姿勢で暫く余韻に浸っていた。

「そろそろ、いいだろう？お前も十分に楽しんだ筈だ」

ウィリアムがテーブル席から笑顔で声をかけてきた。

テーブルの上では、全裸の理沙が四つん這いの姿勢をとられ、ウィリアムが背後から、図太い浣腸器をアヌスに差し込んでいた。近くのテーブルでは調理服を着た身

長三メートルはあるオーグルが、マグロを捌く様な巨大な刺身包丁を研いでいた。

「承知いたしました」

真由美は少し上擦った声で答え立ち上がり、近くに入った使用人の若い女に、近くに来るように命じた。二十代前半と思われる女は、死人のように青白い顔をしており、虚ろな視線で真由美の顔を見ていた。女のコメカミには銀色をした電極が刺さっていた。

「お前にご馳走をあげるよ。ご覧。中々ハンサムだろう？」

真由美は、使用人の女を学の股間近くに座らせた。

学は大量の精液を搾り取られ、意識が朦朧としていた。

自分が全裸で大理石の床に横たわっていることは分かっていった。股間が寒々と感じられた。すぐ近くに若い女二人がいるのを認めた。

「食う前に楽しんでいいよ。さあ、ぼさつとしていないでチ*ポを舐めるんだよ」

真由美が、使用人の女に声をかけているのがわかった。

「止めてくれ！」

学は、女が行動をコントロールされたゾンビであることを思い出し、全身が総毛だった。

「静かにおし！裏切り者の分際で」

真由美の拳で腹部を強打され一瞬気が遠くなった。

ゾンビ女は、学の股間に膝間付いて暫く男根を見詰め

ていた。何かを思い出したように手を添えてきて、ゆつくりと扱き始めた。氷のように冷たい手の平で男根を馴染めながら意識が戻ってきた。学は見た。ゾンビ女が男根に喰らいつき、激しい勢いで吸い始める様子を。不意に真由美が立ち上がり、ゾンビ女の背後に立つのを認めた。真由美は冷たい笑みを浮かべながら、ゾンビ女のコメカミに刺さっている電極に指をかけた。

「……」

学はゾンビ女から逃れようとしたが、がっちりと腰を掴まれまったく身動きができなかった。脇の下から冷や汗が噴出した。叫び出したかったが、恐ろしさのあまり声にならなかった。

真由美が、一気に電極を引き抜いた。不意に激しく

口腔性交をしていたゾンビ女が動きを止めた。ゆつくりと顔を上げた。ぼんやりとしていた表情が、見る間に悪鬼の表情に変貌した。乱喰歯が林立する口蓋を大きく開け、目の前の男根に齧り付き根元から食い千切った。

「ギャー！」

学の絶叫が中庭に響き渡った。ゾンビ女は、絶叫し全身を振わせる学の睾丸を食い千切り咀嚼し飲み込んだ。太腿に噛付き、肉を噛み裂き吞込んだ。

鋭い爪で、息も絶え絶えな学の腹部を縦に引裂いて、内臓を掴み出し、頬張った。

学が生きたまま、肉を貪り食われている間、理沙は

テーブルの上で激しい排泄感と戦っていた。腸内は浣腸液の液体が満たされ、今にもアヌスから排泄物が噴出しそうであった。苦しみに悶えながら、学の死に様を見詰めていた。生きることは既に諦めていた。自分もすぐに学の後を追うことになるであろう。理沙は何者かに腰を掴まれるのを感じた。見ると別のゾンビ女が理沙のむき卵のようにすべすべで盛り上がった白い尻に顔を押し当てていた。

「いいぞ。たつぷり糞をするがいい。ゾンビが後始末をしてくれるから心配することは無い」

近くでウィリアムが楽しげに話している声が聞えて来た。排泄感是我慢の限界にきていた。

「いやー！」

理沙の小さなアヌスが膨れ上がり、排泄物が噴出した。ゾンビ女がそれを口で受けた。一滴も漏らすまいと顔を押し付けてきた。やがて排泄感は収まった。ゾンビ女がほとんどの排泄物を吞込んでいた。代わりのゾンビ女がやってきて汚物に塗れたアヌスを舐め始めた。理沙は、アヌスをゾンビ女に舐められながら声を限りに泣いた。

やがて、ゾンビ女の姿が消え、調理服を着たオーグルに抱き上げられた。そのまま、中庭の隅に造られた洗い場で、全身を洗い清められた。股間は特に念入りに洗われた。

全身を洗淨された後で、中庭の中央に置かれた調理台の上に横たえられた。オーグルが理沙の足首を片手

で掴み、刺身包丁の柄を掴んだ。理沙はまるで俎板に置かれた鯛の様であった。周りでは研究所員や妻達が取り囲み、息をのんで様子を見守っていた。

「処刑の時間だ。今宵は極上の美女の柔肉を楽しもうではないか」

ウィリアムが、自分の首を指先で搔つ切る仕草を見せた。調理服を着たオーグルが、理沙を横向きに横たえ、盛り上がった白い尻を押さえつけ、アヌスに巨大な刺身包丁の切っ先を差し込んできた。未経験の筆舌しがたい苦痛が理沙を襲った。オーグルは刺身包丁を前後させ、背骨の近くを頭部に向けて切り進んでいく。驚くべき怪力により理沙の背中が骨もろとも切り分けられていった。理沙は、白目を剥いて泡を噴いて

いた。

背中を切り分けられた後で今度は、臍に刺身包丁を入れられ、腹部を縦に切り分けられた。内臓を掴み出されながら、理沙は出血多量のためショック死した。頭部を切り落とされ、両乳房も切り取られた。美しい太腿や尻にも包丁が入れられ、切り裂かれた。

三十分後、中庭に置かれた数十卓のテーブルには、理沙の肉体から切り取られた柔肉を使った料理の数々が並べられた。腿肉や尻肉のステーキや、八宝菜やシュウマイなどの中華料理やシャブシャブやすき焼きなどの日本料理が所狭と並べられ、正装した男女が歓談しながら箸を動かしていた。

第二章 オーグル族

午後三時。黒木と美奈を乗せたオフロードバイクは、都内を北方に向け進んでいた。研究所を脱出してから既に二日が経過していた。追撃を警戒し、高速道路や主要幹線道路は避けていた。目立たないように小路を抜けていくのだが、速度が出ないので都心を抜けるのに多くの時間を要していた。

また、襲い掛かる無数のゾンビ達を撃退するのに多くの時間を割かれていた。いたるところにゾンビが現れ、バイクめがけて突進してきた。

「大丈夫？」

後部シートに跨る美奈が、黒木の頭部に顔を寄せ、

声をかけてきた。

「ゾンビを相手にするのもいい加減疲れたよ。美奈ちゃん
の太腿で眠りたいね」

黒木がおどけた調子で答えた。

「えっ！何て言ったの？」

黒木の声はバイクのエンジン音でほとんど聞こえ
なかった。

「何だ。あれは？」

黒木が、バイクを急停車させた。後輪が滑り、ビル
に囲まれた小路の真ん中に停まっていた。距離百メー
トルの地点に巨大な装甲車両が現れた。

「逃げて！敵よ」

美奈は後部シートで黒木の背中にしがみ付き、叫ん

だ。

「新手の追っ手か」

黒木は独り言のように言いながら、バイクを反対向きにスタートさせたが、すぐに停車させた。反対方向の小路も巨大な装甲車に塞がれていた。

「囲まれやがった」

黒木は、周囲の状況をさっと見た。すぐ近くにビル
の裏口が見えた。その時、両側から装甲車が怒涛のよ
うなエンジン音を立てながら、迫って来た。黒木は、
背中に背負っていた自動式ライフル銃を片手に持ち、
金属製のドアに守られた通用口に向けて引き金を引
いた。

銃声とともに、四六〇ウェザビーマグナム弾が金属

製のドアが吹き飛ばした。バイクをビル内に進入させた。幅二メートルくらいの通路を進んでいく。行く手を阻むガラス扉は、アラスカンで四五四カスール弾を撃ち込み、粉碎した。黒木は、バイクを階段ホールに進ませ、そのまま、バイクで階段を登り始めた。すぐに背後から獣の咆哮が聞こえて来た。

黒木は一気に屋上まで、上り詰めた。屋上へと続く扉の蝶番をアラスカンの四五四カスール弾で吹き飛ばした。一瞬後、二人が乗るバイクは、地上三十メートルの屋上で停止した。

「どうする気なの！」

美奈は黒木の背中にしがみ付き、泣き叫んだ。

「逃げるに決まっているだろう」

黒木がアクセル全開でクラッチに繋いだ。ガクンという衝撃とともにウィリー状態になり屋上を突き進んだ。高さ五十センチの壁に前輪を乗り上げるようにして、次の瞬間、虚空へと飛びあがった。そのまま五メートル離れた隣のビルに飛び移った。数回バウンドしながら体制を立て直した。その時、背後から獣の咆哮が聞こえてきた。身長三メートル以上はあり、軍服を着たオーグル兵五体が悪鬼の形相をして追いつがってきっていた。黒木は全速でバイクを走らせ、隣のビルに飛び移った。オーグル兵達も執拗に追いつがってくる。咆哮の合間に美奈の絶叫が聞こえていた。

突然、黒木はバイクを急停車させた。後輪がロックし、横滑りになったが転倒することは無かった。

「きりがないぜ」

黒木は吐き捨てるように言ってから、バイクに跨った状態で背負っていた四六〇ウエザビーマグナムライフルを構え、三十メートルの距離に迫ってきた先頭のオーグルに向けて引き金を絞った。轟音とともに先頭を走っていたオーグルの頭部が粉々に砕け散った。二弾、三弾と続けざまに引き金を引き絞った。後続のオーグルの腹部が破裂し、胴体が真二つに千切れた。残る三体のオーグルは、屋上の上に腹這いになり、あるいは給水塔の陰に隠れた。

「かたをつけてやるぜ」

黒木は、不敵な笑いを浮かべ美奈を背負ったまま、バイクから降りた。二人を繋いでいたベルトを外した。

「ここでじっとしているんだ。すぐに戻るから」

「お願いひとりにしないで……」

「本当にすぐに戻るよ」

すがりつき、泣きじゃくる美奈を優しく引き離した。オーグル達が潜む場所に振り返り、背負っていた鞆から大振りの斬鉄剣を抜き放った。斬鉄剣を肩に担ぎながら大股で歩き始めた。

その時、轟音がして、一発の銃弾が黒木に襲いかかった。斬鉄剣が動き、銃弾を跳ね返した。黒木が疾走に移った。一気に敵との距離を詰めていく。前方から一体のオーグル兵が、片手に巨大な斧を持ち悪鬼の形相で飛び出してきた。黒木は上段から振り下ろされた斧を軽々とかわした。斧がビルの屋上に深々と突き立

てられた。斬鉄剣が一閃し、オーグル兵の胴体を両断した。

下半身を失い、屋上に横たわるオーグルは驚愕の表情を浮かべながら、絶命した。そのとき、再び銃声が出て、黒木の髪の一部が飛び散った。銃弾が頭部すれすれの所を通過したのだ。黒木は顔をしかめていた。

銃弾で傷つけられた頭皮は一瞬後には元に戻っていた。一体のオーグルが、ヘリや装甲車を攻撃する際に使用する対物用の軍用ライフルのバレット ㄥ八二を構えて、立ち上がった。距離は三十メートル。バレット ㄥ八二の銃口が轟音とともに火を噴いた。

黒木が斬鉄剣で銃弾を受けた。火柱があがり、銃弾はあらゆる方角に飛んで行った。オーグルが二弾目をチ

ヤンバーに送ろうとボルトを操作したその時、黒木の手から斬鉄剣が離れ、矢のようにオーグル兵の頭部に突き刺さった。オーグル兵の巨体がゆっくりと後ろ向きに倒れた。

黒木がオーグル兵達の相手をしている時、ひとり残された美奈は、茫然とした表情で立ち尽くしていた。動こうにも恐怖で体の自由が利かないのだ。

そのとき、美奈は氷のような殺気を感じた。黒い巨大な影が疾風の如く襲いかかってきた。巨大な腕が腰に巻きつき、持ち上げられた。一瞬のできごとであった。見上げると悪鬼の形相をしたオーグルの顔があった。オーグルは口元に大量の唾を浮かべていた。美奈

は恐怖のあまり、悲鳴をあげることにすら忘れていた。美奈を抱えたオーグルは脱兎のごとく猛然と駆け出した。隣のビルに飛び移り、ビル内へと続く鋼鉄製の扉を蹴破り進入して行った。

美奈は一瞬、意識を失っていた。股間の異様な疼きで意識が戻った。恐る恐る目を開けた。美奈の両目が見開かれ、絹を裂くような悲鳴が迸った。目の前には巨大なオーグルの顔が見えていた。軍服を着た三体のオーグル兵達が美奈を見下ろしていた。皆、口元からは大量の唾液を滴らせ、瞳には淫らな光をたたえていた。

「目が覚めたようだな」

「それにしても最高の獲物だな」

「俺達で食ってしまおうぜ」

オーグル兵達が口々に話し始めた。一体のオーグル兵が美奈の盛り上がった白い乳房を驚掴みにしてきた。美奈は一糸もまとわぬ全裸にされていた。首に吊るしておいた毒薬入りペンダントも外されていた。

股間の疼きが激しくなっていた。恐る恐る股間の方を見下ろすと、もう一体のオーグルが狂ったように美奈の臍を舐めていた。ざらついた巨大な舌が臍やクリトリスを縦横無尽に舐めまわしていた。

「いやー！」

美奈は声を限りに泣き叫んだ。恐怖のあまり失禁した。臍を舐めていたオーグルは歓喜のうなり声を上げながら、

美奈の尿を貪り飲んだ。

「おい。自分ばっかり楽しむな」

「そうだ。そろそろ交代しろ」

「女を裏返しにしろ。ケツが見たいんだ」

美奈の裸身に何本もの手が伸ばされ、鉄製の床にうつ

伏せにされた。

「なんて旨そうなケツなんだ。このまま食らいつきたい
ぜ」

不意に尻の割れ目に巨大な顔を押し付けられた。長い

舌でアヌスを舐られた。生暖かい舌先をアヌスに入れよ

うとしてきた。美奈の泣き声が激しくなった。怪物達に

裸身を弄ばれているのだ。おぞましさのあまり、意識が

遠のきかけた。

「よこせ！」

罵声が聞こえ、美奈は別のオーグルに抱き寄せられた。マンダリ返し of 姿勢にされ、剥き出しの臍を激しい勢いで舐られた。他のオーグルが小指を美奈のアヌスに入れてようとしてきた。男根のようなオーグルの小指が直腸内を掻き回した。むっちりとした太腿や盛り上がった白い乳房にもオーグル達の手や舌が這いまわっていた。美奈は全身を震わせ、声を限りに泣き叫んでいた。

「美女はケツの穴もいい味がするぜ」

オーグルがアヌスを犯していた小指の先を舐めまわしながら、大声を出して笑った。

「なあ、こんないい女をヴァンプ野郎に引き渡すのは勿体ないぜ」

「そうだ。俺達でいただくこうぜ。俺は脂の乗ったケツを食うぞ」

「何言ってやがる。そこは俺が狙っていたんだ。お前はおっぱいを食えばいい」

「オマ*コは誰が食うんだ？」

オーグル達は手や口で美奈の性器を弄びながら、話していた。

「おい！俺の分も残してくれよ」

「お前は黙って運転している！事故りやがったら承知しないぜ」

「はいはい。わかりました中尉殿」

美奈は混濁した意識の中、自分が車両に乗せられていることを知った。たぶん、オーグル兵達が移動手段とし

て使用する大型装甲車の中なのだろう。それはインターネットから知りえた情報であった。

「もうこんな時間か。そろそろ頂くとするか」

運転手のゾンビから中尉と呼ばれたオーグルが、腕時計を覗き込んでいた。

「女。お前をオマ＊コから食らってやろう」

オーグルは、美奈をマングリ返しにした状態で、美奈の瞳に顔を近付けてきた。乱喰歯が林立する巨大な口を開けていた。口元から大量の唾液を滴らせ、美奈の股間を淫らな笑みを浮かべながら、見詰めてきた。美奈は生きたままオーグルに食い殺される運命を知った。オーグル達に生きたまま肉体を鋭い牙で食い破られるのだ。たぶん、一片の肉も残らないであろう。片腕を他のオーグ

ルに持ち上げられた。そのオーグルは美奈の白い腕に喰らいつこうとしていた。股間にいたオーグルが大量の唾液を滴らせた大口を開け、今まさに美奈の膾肉に喰らいつこうとしたどの時、大型装甲車が急停車した。衝撃でオーグル達が床に倒れた。美奈は膾に喰い付こうとしていたオーグルの顔を尻で踏みつけにしていた。

「何だ、ありゃ！」

運転していたオーグルが素っ頓狂な声を出した。

「馬鹿野郎！何で急ブレーキを踏みやがったんだ！」

そのオーグルは自分の顔を尻で踏みつけにしていた美

奈の尻を持ち上げ、立ち上がった。

「いいから中尉。ちよつとこつちに来てください」

中尉と呼ばれたリーダーダ格のオーグルが、意識が朦朧と

している美奈の裸身を小脇に抱え、大股で運転席の方に移動した。大型装甲車の前方百メートルのところに、黒木が斬鉄剣を片手で肩に担いだ格好で立っていた。

「軍曹。発進しろ。あのチビを轢き潰すんだ！」

「了解しました」

大型装甲車がガクンという感じで発進し、一気に速度を上げていく。黒木の身体は大型装甲車と接触する寸前に大きく宙に飛びあがった。すぐに天井に着地する音が聞こえてきた。大型装甲車は急停止した。衝撃でオーグル達は、再び床に叩きつけられた。

「奴が来るぞ！」

額から血を流した中尉の階級を持つオーグルが叫んだ時、天蓋のハッチが開け放たれた。

「女を盾にしろ！」

再びそのオーグルが叫んだ。美奈は急停車したときの衝撃で、車両後部まで弾き飛ばされていた。その際、美奈はオーグル達の身体がクッションとなり、難を逃れていた。美奈の近くにいたオーグルが茫然と佇む美奈を捕まえようと両腕を大きく開き、にじり寄った時、上から斬鉄剣の刃が突き下ろされ、そのオーグルの頭頂部を貫通した。オーグルは白目を剥き全身を震わせ、床に倒れこんだ。

「貴様ら！化け物の分際で、大事な美奈ちゃんを弄びやがったな！」

黒木が床に降り立ち、オーグル兵達に向かい声を張りあげた。

一体のオーグル兵が、デザートイーグル五〇A Eを黒木に向け引き金を絞った。鼓膜が破れそうなほどの轟音がした。必殺の銃弾は黒木が構えた斬鉄剣の刀身に弾かれ、別のオーグル兵の頭部を破壊した。

それから先、車内では乱戦が始まった。バレットM八二の銃身を振り回しながら、一体のオーグル兵が突進してきた。黒木は左腕で背後の美奈を庇いながら、右手に持った斬鉄剣を上段から一閃させた。血飛沫が上がり、オーグル兵の両腕がバレットM八二の銃身を持ったまま切断された。

両腕を失ったオーグル兵が激痛のあまり、床に両膝を着いたとき、再び、斬鉄剣が一閃し、頭部を横に薙いだ。頭頂部を失ったオーグル兵の死骸を飛び越えるようにし

て、次のオーグル兵が斧を振り上げ襲って来た。黒木の頭部目がけて、斧を振り下ろした瞬間、斬鉄剣が下段から上段へと凄まじい速度で一閃した。斧は、刃の部分が真二つとなった。斧を失い、後方に逃げ延びようとしたオーグル兵の巨大な背中に斬鉄剣が突き刺さり心臓を破壊した。

残る中尉の階級を持つオーグル兵は、再びデザートイーグル五〇AEを黒木に向けてきた。轟音が鳴り響き、黒木の斬鉄剣が、五メートルの至近距離から放たれた銃弾を弾き返した。黒木は恐るべき動体視力により、瞬時に銃弾の動きを掴んでいたのだ。全弾を斬鉄剣により弾き返されたオーグル兵は、デザートイーグルを黒木の顔目がけて投げつけてきた。奇声をあげながら、黒木目が

けて突進した。黒木は、斬鉄剣を下段から上段へと一閃させた。オーグル兵の股間が裂け、大量の鮮血が飛び散った。オーグルは白目を剥いて声を限りに絶叫した。

「俺の美奈ちゃんを玩具にした報いだ」

黒木はふてぶてしい笑みを浮かべながら、斬鉄剣を一閃、二閃させた。オーグル兵の両腕が根元から切断された。さらにもうひと振りすると、両足が両断され、ダルマとなったオーグル兵は床に叩きつけられた。

「もう止めて！」

背後で見ていた美奈はあまりに凄惨な光景に、黒木の背中にすがりつき声を出して泣き始めた。

「こいつは美奈ちゃんを玩具にして、喰らおうとしたんだよ。楽に死なせるわけにはいかないな」

黒木は、後部扉を開け放ち、まだ辛うじて息のあるダ
ルマになったオーグル兵を車外に放り投げた。運転手の
オーグルを含め残るオーグル達の死体をすべて車外へと
蹴落とした。

黒木は、オーグル達の死体を処分し終わると、茫然と
した表情で佇む美奈の方を向いた。美奈は、全裸のまま
嗚咽を漏らしていた。黒木が近づいた。

「何？」

無言のまま、虚ろな表情で黒木を見上げる美奈に抱き
ついた。美奈の唇に吸いつき、舌を絡ませ唾液を吸った。

「止めて！こんな時に」

美奈は拒絶し、黒木の分厚い胸板を両手で叩いた。黒
木は無言のまま、美奈の前に膝間ついて、両手で美奈の

素っ裸の尻を抑え、股間に口をつけようとした。

「そんなことしないで！そこは汚れているのよ」

「何がだ？こんなにきれいなのに」

黒木は透きとおった瞳で美奈の顔を見上げた。

「だって……」

美奈は上を向いて絶句した。美しい瞳から一滴の涙が

零れ落ちた。

黒木はおもむろに美奈の膣に口をつけた。オーグルの

唾液がこびり付き、異臭を発していたが、狂ったように

舐め回した。やがて、膣液が溢れ出しオーグルの匂いは

消えた。黒木は、一旦美奈から離れ、黒革のジャケット

を脱いで床に敷き、その上に美奈の裸身を仰向けに横た

えた。

シャツとズボンを脱ぎ棄て全裸となった。贅肉がまったく見られない鍛え抜かれた裸身が露となった。美奈の両足を押し開き、極限まで勃起した男根を突き入れた。美奈は眼を閉じて、嗚咽を漏らしていた。黒木は、優しく腰を動かし始めた。

第三章 美人姉妹と吸血鬼

時刻は午後五時過ぎ、黒木はオーグル達から奪い取った大型装甲車を運転していた。バイクは車内に格納しておいた。美奈は後部座席で黒木のジャケットに包り、安らかな寝息を立てていた。

大型装甲車は、千葉県の県境を越えていた。国道を時速八〇キロの速度で疾走していた。今のところ、追手の姿は見えなかった。夕闇の中のどかな田園風景が見えていた。都心を離れば離れるほど、ゾンビの姿は減少した。時より、路上をふらふらと歩きまわるゾンビを轢き飛ばした。

それから北に十キロほど進み、大戦前は人口二十万人ほどを有していたT市に入った。少数のゾンビ以外存在

しない中心街を抜け、閑静な住宅街に入った。黒木は今夜の寝床を探していた。黒木ひとりなら血なまぐさい装甲車両の中で一夜を過ごすことも可能であるが、美奈と一緒にだった。彼女には休息が必要だった。

陽は沈み、辺りは薄暗くなり始めていた。少し進むと白亜の豪邸が視界に入った。黒木は、何の躊躇いもなく、豪壮な造りの門前に大型装甲車を停車させた。すぐに頑丈な造りの門扉がゆっくりと開き始めた。

大型装甲車は、ゆっくりと敷地内に侵入して行った。広葉樹に囲まれた石畳の道路を百メートルほど進んだ場所に先ほど見た白亜の豪邸が現れた。西洋風で総二階建ての建物は、建坪が数百坪はあると思われた。敷地面積にしても数千坪はある筈だ。

何の疑いも無く大型装甲車を受け入れるのは、間違いなく敵と思われた。あるいは、罠であろうか。黒木は、車内の窓から、眼前の豪邸を見上げていた。

すると、正面入口であるオーク材で造られた扉が音もなく開けられ、中から数人の人影が現れた。二人の男に三人の二十代くらいに見える娘達であった。

門燈の明かりが彼女達の美しい容姿を浮かび上げさせていた。男達のひとりには、痩せ形の中年男であり、髪は総白髪でオールバックにしていた。もうひとりは若い白人の男であり、幽鬼のように血の気のない白い顔をしていた。黒木は一瞬でその男が要注意人物であることを見抜いた。

若い男を除いた者達が、大型装甲車に向けて深々と辞

儀をした。若い男は尊大な顔で、冷やかな笑みを浮かべていた。

黒木は、とりあえず美奈を車中に残し、後部扉から車外に出た。黒木を見たとたん、彼らは皆、当惑の表情を浮かべた。黒木は構わず大股で彼らに近づいた。若い男が、獣のような唸り声を発し、黒木に飛びかかってきた。胸倉を掴み、首筋に噛みつきこうとしてきた。

「お前。ヴァンプ野郎のくせにあんまり強く無いな」

黒木は軽々と若い男の腕を取り、背中に振り上げた。

美奈から不死身の吸血鬼について色々聞かされていたが、拍子抜けした感じだった。男の腕力は通常人の数倍程度だった。

「お前も種族なのか？」

若い男は、弱弱しく聞いてきた。

「種族？俺がか？」

黒木は、笑いを堪えていた。他の連中は、その場を動くこともできず、二人の様子を、固唾を吞んで見詰めていた。

「違うのか？お……お前は手配中の……」

「俺のことを知っているのか？」

「……」

「何とか言え。腕をへし折られたいのか？」

黒木が両腕に力をこめた。男の顔が苦痛に歪み、額から冷汗が流れ落ちた。

「た……助けて下さい。ピータ様に乱暴なことはしないで！」

娘達のひとりが、ふたりのもとに走り寄り、男の腕を掴んでいる黒木の手にしがみ付いた。

「お譲ちゃん。こいつは人間の生き血を吸う吸血鬼だよ。

この場で俺にぶち殺されても文句は言えない筈だ」

黒木は娘の美しい瞳を見つめながら言った。

「ピータ様はそんなじゃありません。私達を匿ってくれているんです」

「何方か存じませんが、娘の言うことは本当です。申し遅れましたが、私はこの屋敷の主である大沢栄太と申します。これが末娘の里奈りな。そちらの二人は真菜まなに綾香あやかと言います」

それまで、無言でいた中年男が黒木に真剣な眼差しを向けて来た。紹介された三人の美しい娘達は軽く会釈を

した。

「何か複雑な感じがするな。まあ、いいか。変な気を起すなよ。そのときは八つ裂きにしてやるからな」

黒木は、ピータという名の吸血鬼を開放した。男は、鋭い目つきで黒木の顔を見上げてきたが、逆らおうとはしなかった。

「外は危険なので、中に入りましょう」

再び中年男が黒木に話しかけてきた。

「そうさせてもらうよ。それとひとり連れがいるんだ。

彼女も連れて行く」

黒木は、大型装甲車に戻り、屋敷の裏手にある奥深い森の奥に装甲車を隠した。

三十分後、黒木と美奈は五十畳の広さはある広大な居間に案内されていた。イタリア製の高級ソファセットにその家の住人五人と二人が座っていた。黒木は改めてこの家の住人達を見渡した。二十代前半から半ばくらいに見える娘達は、美奈に匹敵するほどの美貌の持ち主であった。三人ともブランド品の高級な衣服を着ていた。

「あんた達はいったい何者なんだ？ヴァンプ野郎の手先か？」

黒木が最初に口を開いた。

「いえ、違います。私達家族は、大戦前からこの街に住んでおりました。ここは私達の家です。大戦後、種族達に捕えられるところをピータ様に救われたのです」

屋敷の主である大沢が、黒木の問いに答えた。時より、

ピータの横顔をちらりと見た。美奈は黒木に寄り添うようにして、一言も話さなかった。時よりピータに怯えた視線を向けた。

「では聞こう。ピータ。お前は何故、この人達を助けたんだ？」

「お前に答える義理は無い」

ピータは一瞬、娘達のひとりに視線を送り、すぐに俯いた。黒木はピータの動揺を見逃さなかった。

「そういう訳か。まあいいだろう。今晚は世話になるつもりだ。食い物と風呂それにベッドを提供してもらいた
い」

その家の二階にある客室は三十畳ほどもあった。隣接

するバスルームは十畳ほども広さがあり、大理石で造られた洗面台やウォシュレット付きのトイレが備え付けられていた。浴室は大人五人がゆったりと浸かれるほどの広さがあった。黒木は部屋に入り、内部の様子を確認してからすぐに美奈の衣服を脱がせようとした。

「あの人達を信じて大丈夫なの？」

「奴らを皆殺しにしろと言いたいのか？」

「そんなこと言ってないわ……」

「あのヴァンプ野郎のことが気になるのか？」

黒木は美奈を抱きしめ、優しく尋ねた。

「……」

美奈は無言で頷いた。

「心配するなって。美奈ちゃんのこと俺が守る。だから

ら、いいだろう？」

「……」

「決まりだな」

黒木はあつと言う間に美奈を全裸にし、自分も衣服を脱ぎ棄て、豪華で広々としたバスルームに入って行った。

黒木はまず、美奈の全身にシャワーの湯をかけてから、美奈を床に横たえボディソープをつけたスポンジで丹念に洗い始めた。美奈は為すがままだ。股間や乳房は特に丁寧に洗い清めた。髪もシャンプーとリンスで丹念に洗った。自分の全身も洗い清めてから、二人で広大な浴槽の湯に浸かった。

「生き返るようだな」

「うん」

黒木は美奈の背後に座り、美奈を背後から抱き締めるようにしていた。美奈の豊かな乳房と股間に手を這わせていた。美奈が後ろを向いて、目を閉じた。黒木の唇が美奈の唇に合された。それからふたりは浴槽内で互いを貪りあった。

「もう駄目。のぼせちやいそうよ」

「俺もだぜ。続きはベッドルームでな」

黒木は美奈を両手に抱き立ち上がった。数分後、二人は客室のダブルベッドで抱き合っていた。黒木は美奈をうつ伏せにさせ、狂ったように美奈の美尻を舐めていた。美奈は目を閉じ、シーツを掴み締め必死に耐えていた。黒木の舌がアヌスの周りを執拗に這いまわっていた。黒木は、美奈を仰向けにさせ、長い両足を大きく開かせ、

膾に口を付けた。まるで何かに飢えているように激しく舐め始めた。美奈は背筋を仰け反らせ、快感に喘いでいた。

そのころ、一階にある居間では、ピータと家の主である大沢栄太が、ソファに腰掛け二人で話し込んでいた。

「さつきは本当に驚きましたよ。装甲車から降りてきたのが見知らぬ人間でしたからね」

大沢が作り笑いを浮かべながら、ピータが持っていたグラスに赤ワインを注ぎ足した。

「俺も驚いたよ。てっきり州兵が視察に来たものと思っていた」

「ピータ様。あの二人をどうするおつもりですか？」

「死んでもらうしか無いだろう」

テーブルの上にグラスを置き、遠くを見つめる様な顔を
をした。

「エリザベート様に知らせるのですか？」

大沢が、両目を見開き、神経質そうに自分の膝を摩つ
た。

「そんなことをすれば貴方達の身も危険になる。ここの
軍隊を使おうと思っている」

「守備隊長のルドルフ様にお問い合わせするのですね？」

「そのつもりだよ。そうだ。ワイロに使う金は準備でき
るか？」

「はい。まだ地下の倉庫に残っています」

「あのオーグル野郎は、金に目がないからな」

「死体を始末しなければなりませんね」

「男の方は裏庭に埋めればいいさ。女は頂くつもりだよ」

「あの女の肉は柔らかかそうですね」

「食料のストックはいくらあってもいいだろう」

二人は顔を見合わせ、含み笑いを浮かべた。二人は立ち上がり、階段ホールから地下室へと続く階段を降り始

めた。地下にはふたつの部屋が作られていた。大沢は最

初に、分厚い鋼鉄製の扉を押しあけた。部屋のスイッチ

を点けると眩いばかりの反射光が二人の目を貫いた。壁

一面に作られた棚には、黄金色に輝く金の延べ棒が並べ

られていた。総額で数百億円はくだらないほどの純金が

保管されていた。

「延べ棒十キロもやれば十分だろう」

ピータは、金の延べ棒を触りながら、大沢に声をかけた。

「金ならいくらでもお使い下さい」

二人はその足で、もうひとつの地下室に向かった。その部屋も分厚い鋼鉄製の扉で塞がれていた。大沢が扉の鍵を開けた。扉を開き照明を点けた。内部は厨房を兼ねた食糧庫になっていた。入口近くの棚には米や小麦粉などの穀物が納められていた。部屋の中央には調理台や洗い場が設けられていた。二人はさらに奥へと進んだ。奥にも扉があった。扉を開けると、広さ三十畳ほどの部屋に出た。部屋の奥に人影が動いていた。照明を点けると手足を鎖で拘束された二十代前半くらいの女達五人が茫然とした表情で佇んでいた。皆、全裸で美しい容姿を持

っていた。二人の姿を認めると女達はぶるぶると震え始めた。

「客人を持成すのにひとり潰さなければならぬな」

ピータが自分の下顎を撫でながら、女達を見渡した。

「あの美奈という女を代わりに繋ぎましょう」

「そうだな。あの女の肉も俺達の舌を楽しませてくれる筈だな」

「どいつにしますか？」

「あいつにしよう」

ピータは女達の中で最も背が高い女を指差した。高級モデルといってもいい極上の美貌と肢体を持った女であった。その女は、嫌々をしながら後退りした。大沢が女を拘束していた鎖を外し、手首を掴み引っ張り出した。

数分後、先ほど女が、隣の厨房で調理台の上に横たえられていた。両手を大沢が、両足をピータが押さえつけていた。

「血抜きをしないといけませんね」

「任せておけ」

「いや。お願い。殺さないで！」

女は蒼白な顔をして、全身を震わせた。両目に大粒の涙をたたえ、咽び泣いた。

「楽に死なせてやるから、安心しろ。お前の肉で客人を持成さねばならないのだよ。お前の肉は柔らかくでジュシーだろうからステーキがいいだろう」

大沢が、美しい顔を恐怖に歪め、咽び泣く女の髪を優

しく撫で上げた。女の口に猿轡を噛ませ、声を出せないようにした。

ピータは女の股間に口を付け、激しい勢いで膣やクリトリスを舐り始めた。大沢は女の乳房を手で鷲掴みにしていた。ピータの舌技がよほど巧みなのか、恐怖に震え、慄いていた女が、喘ぎ声を上げ始めた。女の膣を舐めるピータの両眼が妖しく輝き始めた。ピータが一旦女の膣から顔を離し、上を向いて獣のような唸り声を発した。

再び女の膣に喰い付いた。女は全身を仰け反らせ、苦痛に美しい顔を歪めた。猿轡で口を塞がれているので声を出すことはできない。ピータが喉を鳴らしながら何かを啜っていた。

十分後、女は調理台の上で、両目を見開き息絶えてい

た。女の膺は食い破られ、調理台の上に鮮血が滴り落ちていた。

「血抜きは完璧のようですね」

大沢が、いやらしい笑みを浮かべながら、死んだ女の股間を覗き込んでいた。

「ああ、最高の味だったよ。調理はお願いする。満腹で少し眠くなった」

ピータは大沢を一人残し、地下室の厨房を去って行った。一人残された大沢は、よく切れる刺身包丁で女の裸身を捌き始めた。完璧とも言える女の裸身が淡々と切り裂かれていく。最初に乳房が切り取られ、腹部を縦に裂かれた。色とりどりの内臓を手掴みで取り出された。うつ伏せにされ、むき卵のようにすべすべで白い尻にも包

丁が入れられ、肉を削ぎ取られていく。大沢は、猥らな笑みを浮かべながら、鼻歌を歌っていた。腿肉も切り取られ、三〇分ほどで主要な肉が切り取られた。

一時間後、一階の食堂に全員が集まり、食卓テーブルを囲んでいた。テーブルの上に置かれた大皿には、様々な肉料理が湯気を上げていた。他の大皿には生野菜をふんだんに使ったサラダが山盛りに盛り付けられていた。また、各自の皿の上には、パンとバターが乗せられていた。肉も野菜もパンも非常に貴重なものだった。

「さあ、食べましょう」

家の主である大沢が、ローストビーフに似た肉塊をステーキ台に切り分け、皆の皿に盛り付けていく。娘達が

笑顔を振りまきながら、肉が盛りつけられた皿を皆に運んだ。大沢や娘達は、熱々のステーキ肉をナイフとフォークで食べ始めた。黒木は彼らの様子を少しの間、見ていた。問題が無いことを確認して、肉を頬張った。口内に筆舌しがたい芳醇な肉汁が広がった。これまで食べたことのない味であったが、癖が無くいくらでも食べることができそうだった。黒木は肉を咀嚼しながら、宙を見詰めていた。

「お気に召しませんか？」

大沢が、ナイフとフォークを置き、黒木に尋ねた。

「いや。こんな味の肉は初めてだよ。でも不味くはない。

……いや。最高に美味しいと思うな」

「そうですか。私が調理しました。非常に珍しい黒豚の

肉です。美奈さんは、肉はお嫌いですか？」

大沢が、美奈に話しかけた。美奈は肉には手をつけず、パンとサラダに少し手をつけただけであった。

「済みません。あまり食欲が無いのです」

そう言いながら、遠くの席に座り赤ワインをグラスで飲んでいたピータを盗み見た。

「彼女は疲れているんです。最高に美味かったですよ。申し訳無いが、今日はこれで失礼して休ませてもらいます」

黒木はナプキンで口を拭いてから席を立った。美奈の手を取り、客室へ向かった。部屋に戻ると、ベッドの上にはパジャマが二人分置かれていた。洗面所にも二人分の洗面用具が準備されていた。

「まるでホテル並みだな。なんか胡散臭い場所だが、生活物資は十分過ぎるくらいストックされているようだ」

黒木が歯を磨きながら、ソファで寛いでいる美奈に話しかけた。

「私もこの家には何か、不安なものを感じているわ。何だか気持ち悪くて……」

「わかったよ。二人で風呂を浴びたら、抱き合って寝よう。それで安心だろうか？」

黒木は美奈を抱き上げ、バスルームに消えた。

翌朝の午前九時。県庁内の知事室では、軍服姿のオーグルと、ウィリアムそして真由美が重厚なソファに座っていた。

「飛んで火に入る夏の虫とは、このことですか」

軍服姿のオーグルが、葉巻を咥えながら、肩を揺すらせ笑い声を上げた。

「ピータを泳がせておいた甲斐がありましたね？」

胸元に大きな切れ目が入った妖艶なドレスを着た真由美が、ウイリアムの腿に手をのせながら、話しかけた。

「ああ。あんな奴でも役に立つことがあるとはな」

「ウイリアム伯爵様。いかがいたしますか？」

オーグルが、ウイリアムに向けて身を乗り出しながら、

訊ねてきた。

「女は生け捕りにするつもりだ。後の者達は皆殺しにする」

「大沢の娘達は私が頂いてもよろしいですか？」

「ルドルフ。お前も好きものだな。娘達は太そう美しいというではないか？」

「はい。初めて見たとき、背筋が凍るほどの戦慄を覚えました」

ルドルフという名のオーグルが遠くを見るような目つきをした。

「背筋が凍るほどの戦慄か？身体に似合わず、詩的な表現を使うな」

「あの娘達を嬲り抜き、その血肉を喰うのが秘かな夢でございます」

ルドルフは満面の笑みを浮かべ、口元に唾液を浮かべていた。

「悪いが、三人は無理だ。ひとりならいいだろう。後の

二人はエリザベート公爵様への貢物とする」

「そうだろうとは思いました。ひとりでも頂ければ十分です。で、貴方様は何を？」

ルドルフは狡猾そうな視線をウイリアムの顔に向けた。

「私は、手配中の女を頂くつもりだ。必要な情報を聞き出したら、存分に鬻り抜くつもりだ。最後にはエリザベ

ート様に謙譲することになるが。そうだ、真由美にはピータをやろう。種族の血は蜜のように甘いというぞ」

「ありがとうございます。よろしければ、手配中の女も抱かせてください」

「いいとも。存分に鬻り抜くがいい。私も美しい女達が絡み合う姿を楽しみたい」

その日の午後三時。空は黒雲に覆われ、今にも大粒の雨が降り出しそうな気配であった。黒木達が宿泊している大沢の家に大型装甲車が向かっていた。大型装甲車は重厚な造りの門をくぐり抜け、前庭に停車した。

「俺達を売ったのか？」

居間の窓から、外の様子を見詰めていた黒木が、ピータの胸倉を掴み締め上げた。近くのソファでは美奈が、不安な表情で戸外の様子を伺っていた。

「誤解しないでくれ。あれは巡回中の車両だ。すぐに帰る筈だ」

ピータの額から汗が滴り落ちた。

「まあ、いいだろう」

黒木がピータを開放した。屋敷の扉が開き、三人の娘

達が歓迎のつもりか、華やかな笑い顔を見せながら装甲車に近着いた。その時、装甲車の後部扉が開かれ、一体のオーグル兵が降り立った。近着いてきた娘達のひとりを抱き上げ、衣服を片手で筆り取り、全裸にさせ乳房に喰い付いた。娘は末娘の里奈であった。里奈は恐怖に顔を引き攣らせ、大きな叫び声を上げた。

「里奈！」

ピータは絶叫し、窓を打ち破りながら戸外に飛び出した。そのオーグル兵目がけて飛びかかった。ピータが宙を飛びながらオーグルに襲いかかろうとした

その時、装甲車から黒い影が飛び出し、ピータに体当たりをかませた。黒い影とピータは互いに絡みつきながら、地面を転がった。一瞬後、立ち上がったのは、黒い

影であった。黒い影は、黒革のスーツを着た若い女であった。遠目に見ても女の美貌がはっきりと確認できた。大型装甲車からは、軍用ライフルのバレットが八二で完全武装したオーグルが次々に降りてきた。逃げ惑う二人の娘達を捕まえ、衣服を筆取り全裸にさせた。

「美奈。敵だ。逃げるぞ！」

「あの人達を置いていくの？」

美奈は黒木に駆け寄り、抱き付いた。

「これは罠だ。たぶん。ここは完全に包囲されている」

黒木は美奈の手を引いて、階段ホールへと走った。

「美奈ちゃんはここに隠れていてくれ。俺はあいつらを始末してくる」

黒木は階段ホールの地下室へと続く扉を開け放ち、美

奈を押し込んだ。

「必ず帰って来てね」

美奈は黒木に抱き付き、口付けをしてきた。柔らかい舌の感触と、美奈の髪から漂うシャンプーの良い香りに黒木の股間は張り裂けそうになっていた。

「用が済んだら、たつぷりと可愛がってあげるよ」

黒木は優しく美奈を引き離し、額にキスをしてから背を向けた。

大沢邸の広大な前庭には、新たに三台の大型装甲車が止まっていた。周囲には軍服に身をかため、軍用ライフルのバレットを八二で完全武装したオーグル達がひしめいていた。黒木達を警戒しているのか屋敷に突入する

気配は見られなかった。

黒木は屋敷の屋根に上がり、下の様子を伺っていた。

流石に豪胆な黒木にしてもオーグル兵の数が多すぎて、手を出しかねていた。

「お前が黒木という名の改造人間か？」

背後から、少し訛りのある言葉をかけられた。黒木の全身がばねのように動き、斬鉄剣を抜き放ちながら振り返った。

「何者だ？」

黒木の声は僅かであるが、掠れて聞こえた。目の前に凄まじいほどの美貌を持った金髪の男が佇んでいた。黒木は男の接近をまったく、感知できなかった。

「私か？他人に名を聞く場合は、己から名乗るのが礼儀

だが……。まあ、いいだろう。私の名はウィリアム。正統な血筋を持つ種族だ」

「なあんだ。ヴァンプ野郎の棟梁のお出ましか」

黒木は嘲るような笑みをウィリアムに投げかけた。

「お前にひとつ提案しよう。目的地の正確な場所と女の身柄を渡せば、命だけは助けてやろう。何処でも好きな場所に行くがいい」

「笑わせるね。この狂っちゃまった世界で、俺には美奈しかいない。美奈を狙うやつは俺がぶつ殺す！」

黒木は絶叫しながら、ウィリアムに向けて斬鉄剣を薙ぎ払った。ウィリアムの姿が霞のように消えた。常人の目では追うことが出来ぬほどの高速で移動したのだ。黒木もまた、高速移動に入った。屋敷の屋根を二つの影が

高速で移動していた。影が空中でぶつかり、ひとつになつて、一瞬で別れた。

「お前は、普通のヴァンプでは無いな？」

黒木が肩で息をしながら、斬鉄剣を正眼に構えていた。数メートル先にウィリアムが平然と佇んでいた。

「人間の科学技術もこれほどまでに進んでいたとは、少し驚きだな。人間で私と渡り合えたのはお前が初めてだ。殺すには惜しい気もする。我が家臣とならぬか？」

「ほざけ！」

黒木の斬鉄剣が疾風の如く、ウィリアムの頭上に振り下ろされた。ウィリアムは懐から取り出した短剣で受けた。ウィリアムは冷たい笑みを黒木に投げかけた。鋼鉄さえも切断する斬鉄剣の一撃をいともたやすく、止める

短剣は通常の代物では無く、それを操るウィリアムの腕もまた驚くべきものがあつた。

そのとき、上空を覆っていた厚い黒雲が裂けた。刃のような陽光が辺りを照らしだした。

「今日のところは、これで失礼する。後はオーグルどもと戦うがいい」

「お天道様が怖いのか？」

「紫外線は苦手なのだよ。肌に皺ができるからな」

ウィリアムは不敵な笑みを浮かべた。ふいにその姿は霞のように消えた。

その時、屋敷の下からオーグル達の罵声が聞こえてきた。無数の銃弾が屋根を貫いた。黒木は斬鉄剣で銃弾を弾き返しながら、前庭で蠢くオーグル達の中に飛び込ん

だ。それから先は乱戦となった。黒木はたったひとり、身の丈三メートル以上もあるオーグル兵の軍勢と戦っていた。斬鉄剣が前後左右に薙ぎ払われ、獣の唸り声を発しながら迫りくるオーグルの手足や首を切断した。

オーグル兵達は同士討ちを恐れてか軍用ライフルは使しなかった。斧や軍刀を振りかざし、次々と襲ってきた。

「切りが無いぜ」

黒木は、屋敷の入口に向かい走り出した。高速モードに転移し、姿は霧のように消えた。

黒木とウィリアムが対峙している頃、地下室では美奈が厨房のある部屋で屈み込んで息を潜めていた。照明は

消しているので、一寸先も見えない暗黒の世界であった。

「こんなところに隠れていたのね」

不意に首筋に生暖かい息を吹きかけられた。照明が灯された。すぐ近くに上下黒革のスーツを着た若い女が立ち、美奈を見下ろしていた。ウィリアムの下部である真由美であった。

「本当に貴女って可愛いわね。食べてしまいたいくらい

よ」

「貴女は誰なの？」

美奈は震えた声で聞いた。

「私？私はウィリアム様の下部である真由美よ。貴女を捕まえにきたのよ」

「さやー」

美奈は絶叫を発しながら、飛び上がった。両手で自動拳銃のシグザウエルを構え、真由美に狙いを付けていた。

「そんな物で私を殺せると思うの？」

美奈は目を瞑りながら引き金を引いた。乾いた銃声が出て、真由美の腹部に小さな穴が開いた。それは見る間に塞がっていった。

「無駄だって言っているじゃない」

真由美はシグザウエルを取り上げ、後方に放り投げた。

茫然と立ち尽くし、震え慄く美奈に抱き付いた。衣服の上から乳房を鷲掴みにしてきた。抱き寄せられ、唇を奪われた。白魚のようなすべすべで冷たい手が、美奈のミニスカートをたくしあげ、パンティの隙間に侵入してきた。膣やクリトリスを舐めるように触って来た。

美奈は必死に真由美から逃れようとしたが、まったく自由が利かなかつた。真由美の手は、美奈の尻の割れ目に侵入していた。アヌスを指で貫かれた。直腸内を掻き回される感触に美奈は嗚咽を漏らした。指が抜かれ、今度は口に薬品の匂いがするハンカチを押し当てられた。一瞬で意識は闇に落ちた。

「後でたっぷり可愛がってあげるわね」

数分後、一台の大型装甲車が県道を爆走していた。車両内部には、ウィリアムと真由美が後部座席に座り、運転席では守備隊長のルドルフがハンドルを握っていた。ルドルフの股間には、大沢の末娘である里奈が張り付いて、巨大な男根を舐めていた。泣きはらした顔をしてお

り、瞳に光は無かった。衣服は一切身に着けておらず、美しい裸身を晒していた。

最後部の荷台スペースには、全裸に剥かれた七人の女達とピータが無造作な感じで横たえられていた。その中に美奈の姿もあった。皆、薬で眠らされているのか、深い吐息を立てていた。他の女達は大沢の娘達と、地下室に捕えられていた食肉用の女達であった。

「黒木とかいう糞餓鬼には逃げられましたが、思いもよらぬ収穫がありましたね」

ルドルフが図太い声で、ウィリアムに話し掛けた。

「そうだな。食肉用の女を四人も隠しているとは、気がつかなかった」

ウィリアムが小窓から、車外を眺めながら横柄な感じ

で答えた。

「今夜は食用女達を捌いて祝杯を上げましょう！」

ルドルフが片手で里奈の股間を弄びながら、陽気な声を出した。

「男は逃がしましたが、美奈という女も手に入れましたし、作戦は成功かと思われます」

隣に座っていた真由美が、ウイリアムに話し掛けた。

「まあな、こちらには人質がいる。奴も簡単には手を出せまい。だが、奴がこのまま黙っているとは思えない。

用心に越したことはないぞ。」

「ウイリアム様。先ほどの話ですが、食用女を一体捌いてよろしいでしょうか？」

ルドルフは相変わらず上機嫌だった。

「好きにするがいい」

ウィリアムは横柄な感じで答えてから、目を閉じた。

「女、もっと気を入れてしゃぶらないと、今夜の夕食にするぞ」

運転席の方からルドルフが里奈を叱咤する声が聞こえてきた。

